



# 第1分科会

朝日町

あさひコミュニティホール アゼリア

## 過疎地域持続的発展優良事例発表会

【コーディネーター】宮口 侗迪 氏 (早稲田大学名誉教授)

【発表者】総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞受賞団体

### スペシャルトークセッション

「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

藤野 英人 氏

(一社) みらいまちラボ合同代表、  
レオス・キャピタルワークス株式会社  
代表取締役会長兼社長 CEO&CIO



畠山 洋平 氏

朝日町次世代パブリック  
マネジメントアドバイザー、  
(株) 博報堂

## 過疎地域持続的発展優良事例発表会

### コーディネーター

## 宮口 侗迪 氏

早稲田大学名誉教授

1946年富山県富山市 (旧細入村) 生まれ。

東京大学地理学科同大学院博士課程にて社会地理学を専攻し早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育・総合科学学術院長を歴任。2017年名誉教授。国土審議会専門委員、大学設置審議会専門委員、自治大学校講師、富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長を歴任、2021年3月まで総務省過疎問題懇談会座長として、新しい過疎法の制定に尽力、地方の発展のあり方について発言を続ける。1985年から富山市在住。『過疎に打ち克つー先進的な少数社会をめざしてー』(原書房) ほか著書多数。



### 過疎地域持続的発展優良事例発表団体 (発表順)

- |             |   |
|-------------|---|
| 全国過疎地域連盟会長賞 | 特定非営利活動法人 本と温泉 [兵庫県豊岡市]<br>家賀再生プロジェクト [徳島県つるぎ町]<br>昭和村 [福島県昭和村] |
| 総務大臣賞       | 朝日町MaaS実証実験推進協議会 [富山県朝日町]                                       |

## 歓迎挨拶



**笹原 靖直 氏**

朝日町長

おはようございます。「全国過疎問題シンポジウム2023inとやま」分科会の開催にあたり、開催地を代表し、一言ご挨拶を申し上げます。

本日はご来賓をはじめ、全国各地から多くの皆様方に朝日町にお越しいただき、心から歓迎を申し上げます。また関係者の皆様におかれましては、平素から過疎地域の振興のため、格別のご尽力とご高配を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

朝日町は、富山県の東端、新潟県との県境に位置しており、海拔0mのヒスイ海岸から標高3,000m級の朝日岳・白馬岳など北アルプスの山々を有する、ダイナミックなパノラマが広がる自然豊かな町であります。人口は約1万人で、65歳以上の高齢者が45%を超えており、多くの地域が共通する少子高齢化、人口減少が喫緊の課題となっております。町としましては、豊かな自然から生まれる恵みや地域に根づく共助・共創の精神を町政推進の中心にすえ、子どもから高齢者までがいつまでも朝日町に暮らし続けたいと思える住みよい街を目指し、各種政策に取り組んでおります。昨今は、保育所から中学校まで連携した「朝日町型保小中一貫教育」やふるさと朝日町に誇りと愛着を持ち続けてもらうための「ふるさと教育」の充実、また高齢者の交通の利便性を高める共助・共創型交通サービスとして、本日事例発表の「ノッカルあさひまち」があります。その他、住民がより便利で豊かな生活がおくれるよう、デジタル技術やマイナンバーカードを活用した新たな住民サービスの創出にも取り組んでおり、持続可能な地域社会の実現を目指しているところであります。

本日の本分科会は、午前中は2部制となっております。第

1部は優良事例発表としまして、今年度の優良事例表彰団体である、特定非営利活動法人本と温泉様、家賀(けか)再生プロジェクト様、福島県昭和村様、朝日町MaaS実証実験推進協議会の4団体による事例発表が行われます。第2部では本会場オリジナルの内容として、レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長CEO&CIOであり、地域創生や起業家育成を目的として富山県朝日町をベースに、古民家の再生とふるさとの魅力発信を通じて地方再生に貢献されており、そうした取組を通じて富山県、そして日本を元気にすることを目的に活動しておられる「みらいまちラボ」合同代表で、現在、朝日町特命戦略推進監でもあります藤野英人様と、新しい行政スタイルとして官民連携を推進する当町におきまして、朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザーとしてご協力いただいております株式会社博報堂の畠山洋平様によるスペシャルトークセッションを予定しております。

また、午後からの現地視察では、朝日町の名物であるたら汁に舌鼓いただくとともに、日本の渚百選にもなっておりますヒスイ海岸が見えるヒスイテラスや、今年の7月に移転オープンしました「ふるさと美術館」を視察いただきます。また美術館内で、朝日町が官民連携を進めておりますDX取組事例の紹介などもさせていただきますこととしております。この機会に朝日町の魅力を体感していただければ幸いです。

最後になりますが、本日御参加の皆様のご今後益々の御活躍、御発展をご祈念いたしまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

宮口／おはようございます。昨日に引き続きまして2日目ということで、楽しく有意義な会にしていきたいと思ひます。昨日も申し上げましたが、私は長年この表彰の委員長を務め、こうした分科会でも司会を続けてきましたが、今年でやめさせていただくことになりまひす。

これが最後の仕事となり多少感慨深いものがありますが、和やかに皆さんと進めさせていただきたいと思ひます。それでは早速発表を始めていただきたいと思ひます。

今日は4団体に来ていただいています。まずは「特定非営利活動法人本と温泉」、それから「家賀再生プロジェクト」、「福島県昭和田村」、ご当地である「朝日町MaaS実証実験推進協議会」の順番で発表をしていただきます。発表いただいた後、それぞれ質問を受け、最後にはさらなる質問、議論の時間を取りたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

それでは早速「特定非営利活動法人本と温泉」から発表いただきます。よろしくお願ひいたします。

### 特定非営利活動法人 本と温泉

【兵庫県豊岡市】

大将／おはようございます。兵庫県豊岡市城崎温泉の「特定非営利活動法人本と温泉」の理事を務める大将伸介と申します。今日はよろしくお願ひいたします。

それでは「地産地読～100年読み継がれる本を作る～」ということでお話させていただきます。私達のまち城崎温泉は、兵庫県の北部、豊岡市の中にある温泉です。豊岡市は面積が約700km<sup>2</sup>、人口が8万人弱で、その中にある温泉地になります。年間約100万のお客様が越しになっています。城崎温泉は、まちの中心に大瀬川が流れており、その周りに七つの外湯が点在してあります。そこをお客様は浴衣に下駄姿でそぞろ歩きをしながら、温泉情緒を楽しんでもらう仕組みになってあります。

このことを「城崎温泉はまち全体が一つの宿」と表現させていただいており、駅が玄関、通りが廊下、旅館が一つ一つの客室で、外湯が大浴場、商店が売店で、城崎に住む者は皆同じ旅館の従業員であるという共存共栄の精神で、今まで約1300年続いている温泉地となります。そんなまちの中に、旅館の経営者の二世、跡取りの集まりである「城崎温泉旅館経営研究会」、通称「二世会」という団体があり、通常はおお客様の誘客ですとか、いろんな形でまちづくりを行ってあります。そして今から10年前の2013年が、城崎温泉として最もご恩のある作家である志賀直哉さんが城崎温泉に来て100周年という機会を捉え、城崎温泉には「歴史と文学といふ湯のまち」という枕詞があることから、もう一度その文学というものでまちづくりを作り直そうと始めたプロジェクトがこの

「本と温泉」という活動になります。

城崎のまちの中で生まれたアイデアで本を作り、それを見に来てもらうということを城崎の新しい魅力として伝えたいと思ひ、今まで活動しております。2013年の活動開始以来、これまで4作品を創っております。まず1作品目が、『城の崎にて』『注釈・城の崎にて』になります。まずは志賀直哉が城崎に来られたことを記念した事業でしたので、『城の崎にて』を本として作り直しました。ただ、100年前の本なので、東京で怪我を負った志賀直哉は、なぜわざわざ城崎温泉に来たのかですとか、どういう心境で城崎に滞在していたのか、ということが本を読んだだけでは分かりにくいということで、注釈本をつけ、2冊セットでお客様に提供することにしました。少し小さい本になるのですが、これは浴衣の袖にちょうど入るサイズに作ってありまして、この本を読みながらまち歩きをしていただき、志賀直哉が見た世界と被せながら、このまちを楽しんでいただければという思いで一冊目を作りました。

2作品目は『城崎裁判』です。万城目学さんに書いていただいたのですが、この装丁は外側がタオル地、中の紙は濡れても破れず、すぐ乾く素材でできています。ですので、これを持ったままお風呂に入っていただき、お風呂の中で本を読んでいただくような体験ができるようになっています。

3作品目が湊かなえさんに書いていただきました『城崎へかえる』です。子供の頃、城崎温泉に来て蟹を食べた、という作者の思い出をつづった本になります。作中に蟹を食べるといふ印象的な表現があるので、この本自体も蟹の殻から身をむくようなつくりになっています。表面も少しざらっとしており、蟹の殻をイメージしています。

最後がtupera tuperaさんに創っていただいた『城崎ユノマトペ』です。先ほどもお伝えしましたが、城崎温泉は浴衣に下駄姿でまち歩きをするということで、下駄の音や人のざわつきが温泉街の魅力となっているので、いわゆるオノマトペです。ね、「カラカラ」とか「ガタガタ」というオノマトペを少しもじりまして、『城崎ユノマトペ』ということで、温泉街の音をこの中に書き込んでいただいております。

こうしてこれまで4作品を創っており、城崎温泉の中でしか売らないという形をとっております。いずれも独特な装丁で本屋の棚には並べられませんが、城崎のお土産屋さんとかで売ってもらう分には問題ないということで、今まで10年間で約7万部、販売総額としましては約1億円を町の中で売っています。普通のお土産屋さんや外湯、文芸館など城崎に関わりあるまちの中の店であればどこでも売っていただいても良いですが、まちの外では売らないということで「地産地読」、このまちの中で生まれてこのまちの中で買って読んでいただくということを我々の思いとして作っております。また、

作っていただいた作家さんとの縁を活かし、定期的に城崎に集まっていたり、作っていく過程や本の魅力を子供たちや城崎に来られるお客様に伝えていただくとともに、この町を本で表現するというのをどうやって考えておられるのか、ということを積極的にPRしていただいています。

また我々「本と温泉」としましては、本だけではなく、城崎温泉をどう見ていただけるかということも伝えたいという思いがあります。今年はちょうど設立10周年ということもあり、アーティストとしての建築家も、城崎を見て、どう感じて物を作るかという部類の一つに入るといって、城崎温泉の旅館を手がけている設計士の方に集まっていただき、「建築と温泉」というテーマで、それぞれの宿を作るときに、どんな表現で城崎を見てそれぞれの旅館を表現されているのか、というトークセッションを実施しました。今年は写真家の川内倫子さんに来ていただき、写真を使った新しい本をこれから作る予定です。

我々「本と温泉」が、なぜ特定非営利活動法人という形でこの城崎のまちづくりに関わっているか、関わっていかねばならないと思ったかといいますと、二つの責任、思いがあります。

まず、作家さんにこうして城崎に来て本を作っていたら、必ずこの本は城崎で売り続ける、絶版させないという作家さんに対する責任です。忙しい先生方に対し、この小さなまちだけでしか売らない、売り続けるという思いを我々の覚悟として、特定非営利活動法人を作りました。

もう一つは、1300年続いてきた城崎温泉ですが、やはり少子高齢化で子供たちが少なくなって跡取りがいなくなっているという現実があります。そうした状況の中、我々は先人から受け継いだものを次の世代に残さなければいけないという責任、思いがあります。

豊岡市では過疎や少子高齢化が進む中、突き抜けた価値を生み出す「小さな世界都市」を目指し、演劇のまちづくりを進めており、城崎にある城崎国際アートセンターには演劇制作のために世界中から人が集まり、このまちで創ったものを持って世界に飛び立っていただいております。そして我々も同じように、城崎で何かができる、何か創られているということをお子たちに伝えていきたいなと思っています。同じものを見ていても演劇の方と作家さんでは全く違う捉え方をしている、ここからものを生み出していることを身近に感じられることで、田舎でつまらないと思っていたまちが実は何か作り出せるまちなのではないかと思ってもらえるのではないかと。そしてそれが子供たちがいつか城崎に帰ってくることに繋がるのではないかと、という思いで我々はこの活動を続けています。この思いがどれだけ伝わるかは分かりませんが、大人の責任として我々はこの活動をこれからも続けて

いき、そしてそれがまちのためにもなると考えています。以上となります。ありがとうございました。

**宮口**／どうもありがとうございました。これまでに本を4冊作られており、販売は城崎の中だけですが、それで合計7万部売れているというのはたいしたものだと思います。今後またどなたかに書いていただける見通しはあるのでしょうか。

**大将**／今年は川内倫子さんという写真家に写真を撮っていただき、英語版の「城の崎にて」を創ろうと思っています。また、来年はいいしんじさんという方に本を創ってもらおうと思っています。

**宮口**／質問はありますでしょうか。

**参加者**／改めまして今回は表彰おめでとうございます。城崎の中でしか本を売らないということで、なかなか全国的に知名度が上がりにくい性質を持っていると思うのですが、今回表彰を受けられ、今後出版数を増やされていく中、外に向けた発信やPRIに関して工夫されていることや、今後こうしたいということがあればお聞かせください。

**大将**／我々が発信するのはなかなか難しいのですが、城崎に来てこの本を買えたということやSNS等でお客様自身に発信していただくことがやはり一番かなと思うので、我々が何か訴えるよりも、良かったという声があることが大事なのではないかなと思っています。また、購入は城崎の中でしかできませんが、作家の先生には本を作るたびに何十冊もお渡ししています。そうすると作家の先生も、城崎でこんなものを作っているということをお名前代わりに渡して伝えていただけるので、そこでいい関係ができていけるのかなと思っています。





**宮口**／ありがとうございます。他に質問はありますか。

**参加者**／城崎温泉には元々たくさんのお客様が来られているのではないかと思います。そこにあって今、文学によるまちづくりをされているというのは、観光面においてどんな影響、効果を期待されているのでしょうか。それともう一点、演劇と文学というものが内面的にどのように、例えば子供たちがどのように育っているかとか、影響を与えていると考えられるのでしょうか。

**大将**／1点目について、城崎は蟹で有名で、関西では年に一度蟹を食べに行くところだと言われていることもあり、客足には波があります。やはり11月から3月の蟹のシーズンはお客様が多いですが、一方で4月から10月のオフシーズンは少なくなります。波があるとやはり個々の経営も雇用の部分が安定しないので、年間で一定したお客様に来てもらえることで、固定した人材を確保していくということにも繋がると思います。

これまでもインバウンドの受け入れ等によりこの差を縮めようとしてきましたが、蟹だけではなく、こうした本だとかいろんな魅力をつけることによって城崎に来ていただきたいと考えています。そうしたことの積み上げが、やはり我々経営する側からすると、年間を通じての安定した収入となり、子供たちにもまた帰ってきてここで商売をしたいなと思ってもらえることに繋がるといいなと考えています。

2点目、演劇や文学についてですが、先ほどお話ししたように城崎は演劇のまちで、毎年数十カ国の方が演劇制作のために城崎に来ていただいています。その方たちに対し、城崎温泉は住民であれば120円で入ることができるのですが、外湯も住民と同じ料金で入っていいですよ、ということにしています。すると、まちの外湯で住民とアーティストが一緒にお風呂に入るという状況が生まれ、「昨日作品を見たよ」などと言える関係性が育まれています。

また、演劇はたくさん作品があり、全くわからないものを見る機会もあります。そうしてこれって何なのだろうということに触れることで、城崎の中にもこれって何なのだろうということがたくさんあるということに気づいてもらえると思います。

これはネタバレになってしまうのですが、『城崎裁判』の中で、たまたまお風呂の中にあつた灯籠を作者の万城目さんはイモリに見立てて、そのイモリが100年前に志賀直哉に殺され亡霊となって出てきていると書かれているように、同じものを見ていても全く別の解釈があって、そこから新しいネタを作って新しい見方ができる、ということが本を読むと分かっ

てきます。子供たちにとって、これからは生きていく上で決まったことをしていけばいい時代ではなく、創造的にもの考えないと変化についていけないと思いますので、常にそういった創造的なことが起こっているまちであり続けられるよう豊岡市も考えていますし、我々もそれに一緒についていきたいなと、こうした取り組みをさせていただいています。

**宮口**／ありがとうございました。もう一人いきましようか。

**参加者**／豊岡市には先日研修会でお邪魔させていただき、元市長の方の講演を聞かせていただきました。「豊岡が世界へ飛び立つための四つのエンジン」ということでお話しいただき、ジェンダーギャップの解消や、多様性を認め合えるようまちとしてアートを取り入れているということをお聞かせいただきました。実際この「本と温泉」という活動を通じて、アートであれば小学校とか中学校に入っているというお話を元市長の方から教えていただいたのですが、子供たちが本に触れる機会が増えたのかどうか、本にどれぐらい興味を持って、読書している方がどれぐらい増えたのかということがデータとしてあるのであればお聞かせいただきたいです。

**大将**／残念ながらデータはありませんが、作品を作るたびに城崎の子供たち全員に配っています。それから、関連する本も寄贈させていただいているほか、先ほどお話ししたようにイベントを開催しています。特に『城崎ユノマトペ』を書いていたいただいたtupera tuperaさんは子供にすごく人気の作家さんで、ご本人もパンダに変装したりと本の中のことを表現されることがすごく得意な作家さんですので、城崎に足を何度も運んでいただいて読み聞かせをしていただいたりだとか、城崎の外湯をtupera tuperaさんの作品であるパンダ銭湯に作り替え、子供たちに入ってもらおうということもさせてもらっています。

本に触れる機会を我々はどう作っていくのか、その結果どうなったのかまではまだ検証できていませんが、場をどうやって作っていくのかということが我々の活動としては大事ななと思っています。

**宮口**／ありがとうございました。この表彰でさらに世間に活動が伝わるといいですね。それでは続きまして、徳島県つるぎ町の「家賀再生プロジェクト」です。お願いします。

## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

家賀再生プロジェクト  
[徳島県つるぎ町]

枋谷／皆さんおはようございます。徳島県から参りました「家賀再生プロジェクト」代表の枋谷京子と申します。よろしくお願いたします。

この度、名誉ある全国過疎地域連盟会長賞を受賞し、このうえない気持ちでいっぱいです。それでは今から説明させていただきます。

私たちが活動する家賀集落は四国の徳島県西部、美馬郡つるぎ町貞光にあります。つるぎ町には徳島市や鳴門市からは車で約1時間、家賀集落はつるぎ町役場から車で20分程度の場所にあります。家賀集落は剣山系で最大規模を誇る、標高100mから600mに位置する傾斜地集落です。かつては家賀百軒百姓と呼ばれ、1963年には89軒、517人の人が住んでいましたが、過疎化が進み、現在は43軒、64人まで人口が減少しています。

また、家賀集落には古代に阿波国やつるぎ町を拓いたとされる忌部(いんべ)氏の史跡が多く残っており、かつては「忌部神社」の神領であったそうです。また、つるぎ町をはじめ、徳島県西部美馬市、東みよし町、三好市の二市二町は「にし阿波の傾斜地農耕システム」として、2018年3月に国連食糧農業機関の世界農業遺産に認定されました。また、農水省の「食と農の景勝地」にも指定されており。続いて、私がこの傾斜地に藍を植えるようになったきっかけをお話します。家賀再生プロジェクトは、私の息子の恩師で、にし阿波地域を世界農業遺産へ認定する際に御尽力された、現在鳴門渦潮高校教諭の方から「剣山系や家賀集落の再興のために藍を植えてみたらどうか」とアドバイスされたことに始まります。ただ私は農業の経験がなかったので、地域の人々に聞きながら、また、その先生が所属する一般社団法人「忌部文化研究所」の力を借り、藍を栽培することにしました。

かつてつるぎ町の山間部では、たばことともに藍がたくさん栽培されていたそうです。それをもう一度復活させようとしたのです。また、家賀集落は私の亡き夫が心から愛していたふるさとでもあり、荒れていく家賀集落を藍で絶対再生させたいという思いがありました。

これが私の藍の畑です。栽培にあたっては、環境面、健康面から考え、世界農業遺産に認定されている、カヤや落葉の有機物を使用する、昔ながらの自然循環の伝統農耕で取り組むことにしました。標高500メートル地点、まさに前例のない「ソラの藍」の栽培の挑戦が始まりました。藍栽培は大変ですが、いくつかのメリットがあります。1つ目が、世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」のブランド認証を受けることができるということで、これがにし阿波のブランドマー

クになります。

2つ目に、化学肥料や農薬を使用しないので、土壌を痛めず、環境にも優しく、医療や食材として使用することができます。私はこの食材としての藍に着目しました。3つ目は、獣害が少ないことです。藍はイノシシとかシカに食べられることはありません。だから柵をする必要もありません。最後に、家賀集落はV字型渓谷にあるため、上昇気流と霧の効果で水をやらなくても栽培でき、とても合理的な農業です。

続きまして、農作業の様子を見ていただきます。これはヒトリビキという農具を使い、昔ながらの傾斜地畑に等高線に沿って畝を作る作業です。このように機械を使わず、人が畑を耕し、栽培しています。

次は秋になるとカヤ場で肥料となるカヤを刈り取る作業です。まさに持続可能な、サステナブルな農業です。今月末には50名の方に参加いただき、カヤ刈りをする予定です。そして、家賀の新たな戦略として、カヤ刈りを「サスティナビリティ体験観光」として大々的に宣伝して打ち出していこうと思っております。

これはカヤを刈った後、伝統農耕のシンボルとなるコエグロを作っているところです。コエグロはカヤを刈り取り束にして、乾燥させて畑にすき込むことで肥料などになります。カヤ場は春になると山菜や薬草の宝庫になります。イタドリ、蕨、ゼンマイ、ふきのとうがたくさん生えてきます。

これは藍の苗を植えている定植作業の光景です。これは畝にカヤと落葉を敷き詰めた藍畑を撮影したものです。カヤは微生物のマンションになると言われるほどたくさん微生物を集めます。徳島大学で家賀のこの藍の畑の土を持って帰って調べてもらったところ、「こんなにたくさん微生物がバランスよく育っている畑は珍しい。」また、「畑はどうしても酸性になるため石灰を撒いたりして中性にしなければいけないのに、ちゃんとPHが整っていて素晴らしい畑だ」と言われました。これもカヤと落葉のおかげかなと思っております。

これは藍の刈り取りの作業で、手刈りしていきます。

そして、先ほどもお伝えしたように、私が着目したのは食べる藍で、藍を刈り取り後に洗い、乾燥後このような粉にします。この粉が色んな形で商品化されています。これは有名な半田素麺で、そこに藍の粉を入れてできたのがこの藍そうめんです。抗酸化作用や血糖値を下げる効果もあるということで、すごく注目されています。

これは藍団子です。つるぎ町の和菓子業者と連携し、団子に藍の粉を混ぜて商品化しました。

また、つるぎ町の特産である柚子に味噌と藍の粉をまぜて「ゆずり藍」という商品ができました。

次はビールです。隣町的美馬市の若手経営者がクラフトビールを製造する会社を作り、藍の粉を混ぜていただき、家賀藍

ビールができました。ラベルは家賀の集落の全景写真を貼っております。これもすごく好評です。

そして藍の粉が海外まで噂を呼びまして、シンガポールのFOSSAというチョコレート会社で使用され、藍のチョコレートができました。このチョコレートは逆輸入され、東京や大阪の百貨店、デパートで販売されております。

次は藍晩茶です。近くの上勝町の阿波晩茶が有名ですが、その晩茶と私の藍の粉がコラボして、新商品である藍晩茶ができました。このようにたくさん商品ができ、徳島新聞にも取り上げられるなど、マスコミの力もあり皆さんに知ってもらえることができつつあります。

藍といえば“染める”をイメージしますよね。私は食べる藍だけでなく、藍で染めることもしております。これは私の藍の畑で生葉染めをしたものです。葉っぱを取ってすぐにジュースで砕き、汁を絞って染めるのですが、この写真のみんなが持っているハンカチのようにすごい綺麗な色に染まります。注目を浴びようになるとつれ、家賀集落ってどこ、藍の畑ってどこ、という方がたくさんいらっしゃるようになり、ボランティアで看板の設置も行いました。

家賀には案内ガイドさんもおります。説明しているのはボランティアガイドをしている方なのですが、これはイギリスから雑誌社の方5名が来ていただいたときに、その方は英語が堪能ですので、英語で紹介している様子です。

これは農福の連携で、「若年性認知症とその家族の会」と一緒にやっています。月に一度草取りに来てくれたり、落ち葉拾いしてくれたりしているのですが、たくさん土にさわること、症状がすごく良くなった方もおられるなど、楽しく遠足みたいな感じで、皆さん手伝いに来てくれております。

これは家賀集落の山を挟んだ向こう側の吉良集落ですが、この集落の方も藍を植えてみたいということで、私の種から植えて今すごく広がっております。

このように、ここの藍は染める藍として使っていますが、私が始めたことをきっかけに地域に藍の栽培も広がっております。徳島大学、地元つるぎ町高校、町役場と連携した「まちづくりファクトリー」では、コエグロ作り意見交換が行われました。また、県外からの企業研修など、週2回～3回いろんなツアーの受け入れもしております。

これは家賀の藍を徳島の小中高の教育活動に使って欲しいということで、鳴門渦潮高校で生葉染めをしたときの様子です。

藍栽培に加え、私は昔ながらの伝統を復活させたいと考えており、春の豊穰祈願祭の際にはこうした箱回しと三番叟の方に来ていただきました。また、秋には豊穰感謝祭を行いました。これは家賀集落の氏神様である児宮神社に能楽師の先生が来られ、鼓を打っている様子です。そしてこれは地元

に木綿麻太鼓をやっている団体があり、その方が能楽師の先生と一緒に児宮神社で演奏してくれた様子です。このように様々な伝統をこれからも伝えていきたいと思っています。これは観光パンフレットです。先ほどご説明した忌部文化研究所の先生が、家賀とかその周辺の見どころを集めた「日本の桃源郷 木綿麻の里 inつるぎ町」というパンフレットを作成していただき、家賀に来られた方や地元の観光施設、興味のある方に配布し、大人気となっております。

今年5月に広島でG7が行われましたよね。その時、ヒルトンホテルが会場の一つとなりました。このとき一階に飾ってあったアートは、藍デザインコンクリートを手掛ける方によって家賀の藍をコンクリートで染めていただいたものになります。

写真に「SAWA FARM」とありますが、5月には世界農業遺産であるこの土地にもものすごく興味を持っていただいた県内外の企業3社が農園を作ることになりました。徳島県でお弁当を作っている「株式会社さわ」さんは野菜を植えられています。そして「ANAあきんど株式会社」、「エスビー食品株式会社」さんはハーブを私と一緒に伝統農業で栽培しています。これは私が徳島県で「徳島集落再生表彰優秀賞」を受賞したときの様子です。

また、現在家賀集落では関東、関西の中高生の修学旅行の受け入れをしております。じゃがいもを掘ったり玉ねぎを抜いたりしてもらい、そしてその野菜をすぐに調理し食べてもらいます。すると都会の子供はおいしいとってパクパク野菜を食べてくれます。そうした農業体験を中心に、修学旅行生の受け入れをしております。

私には長年、家賀に宿泊施設を作りたいという夢があり、忌部文化研究所の方とともにプロジェクトを進めてきましたが、このたび建設することが決定しました。来年の4月に開業できる予定です。住民の方をはじめ皆さんにも、これまではお墓参りに行きたいけど家がない、家が古くて泊まれないとなっていたが、これからはそこに泊まり、そしてお墓参りができるとすごく喜んでいただいております。

皆さん。家賀再生プロジェクトは新たな展開へと進んでいきます。ぜひ家賀の藍畑に来てください。そして宿泊施設に泊まり自然を満喫していただきたいと思っております。

最後に、今まで一緒に頑張ってくれたプロジェクトの仲間、私に家賀で藍を植えるきっかけをくださった先生、そしていつも見守っていただいている忌部文化研究所の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱい입니다。ありがとうございました。

**宮口**／ありがとうございました。会場から何か質問はありますか。



## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

**参加者**／素晴らしい発表をありがとうございました。いくつか質問させてください。修学旅行生を受け入れるにあたり宿泊施設がまだないということで、現在はホームステイか何かで受け入れているということでしょうか。また、まちのどんなところに修学旅行生をご案内して、どんな体験をさせてもらえるのかということをお尋ねしたいと思います。

**枋谷**／「一般社団法人そらの郷」という団体が、山の各家庭に生徒を4、5人ずつ紹介し、民家で受け入れてもらっていますが、今後宿泊施設ができればそれも泊まってもらい、畑でじゃがいも掘りといった農業体験や、昔ながらの料理の提供を行う予定です。現在こうした体験がすごく人気で、春と秋で7000人、経済効果1億という素晴らしい取り組みとなっております。私たちもそのお手伝いさせていただいています。

**参加者**／ありがとうございます。各家庭で4、5人ずつを受け入れ、全部で何人ぐらいの規模までであれば修学旅行は受け入れられますか。

**枋谷**／東京からですと、バスで400人来ます。この場合、世界農業遺産になった2市2町の地域で登録している何百軒に協力していただく必要があります。各家庭4人ぐらいを車で送迎していただいております。現在登録いただいている家庭の数がすごく増えています。またこの受け入れにより、山で農業している以上の収入を得ることができません。

**宮口**／家賀のエリアを超えるような、地域全体への大きいお客さんもおられるということですね。

**枋谷**／そこを期待して宿泊施設を造っています。

**宮口**／行事などができていましたが、訪ねてくる人と地元の人との付き合いはいつもあるのですか。

**枋谷**／やっぱり地元の方に教えてもらったり、手伝ってもらったりしないと初めての人は農作業はできませんので。

**宮口**／地元の方は農業はやらないのですか。

**枋谷**／お年寄りの人が多く、足が痛い、腰が痛いということで農作業ができない方がほとんどです。

**宮口**／どうもありがとうございました。それでは続きまして、福島県昭和村さんに発表していただきます。

### 昭和村 [福島県昭和村]

**永戸**／皆さんおはようございます。福島県昭和村から参りました、産業建設課長の永戸と申します。よろしくお願ひします。発表は「昭和かすみ草『百年産地』を目指して」というテーマにさせていただきました。

昭和村は、福島県西部に位置する周知を山々に囲まれた特別豪雪地帯でございます。

人口が1,129人、高齢化率57.13%、大変高齢者が多い印象を受けられると思いますが、昭和村の高齢者はとても元気でございます。我々の職員は高齢者から常にパワーをもらっているような、そんな元気な高齢者が多いところでございます。最高積雪は2mに達しまして、耕地は標高400mから750m、一番高い集落は900m近いところに点在している村でございます。また、昼夜の寒暖差が大きく、夏季の平均気温が22度と比較的過ごしやすい高地であり、この気象条件が功を奏しまして、かすみ草の栽培に大変適した場所となっております。それから、本州で唯一、伝統織物の上布の原料となる「からむし」を栽培しております。

これがからむし織です。からむしという草から糸を作って、その糸を織ったもので、国の伝統工芸品に指定されております。

昭和村でのかすみ草栽培は昭和58年に始まりました。そして昭和63年には、それまで主だった葉たばこ栽培や稲作から、かすみ草への転換が拡大しました。

平成15年にはかすみ草サミットを開催し、それまでかすみ草の産地として有名だった熊本県や和歌山県の方々をお呼びしました。平成17年には豪雪地帯の雪を利用して、その雪を倉庫の中に貯め、その雪の冷気で花を保存する昭和村農林水産物集出荷貯蔵施設、雪室と呼ばれる施設を作っております。この施設では大型ダンブ300台分の雪を利用しており、その冷気でほぼ一年持っているような状況です。この他にも、村内の中学生を対象に、花を生産している農家さんとともに、教育の一環として「花育」を実施しております。

令和元年には「昭和かすみ草振興協議会」ということで、昭和村のみならず近隣の3町村を加え、合計4町村で振興協議会を設立しました。令和4年にかすみ草の販売額は6億円を突破し、今年度はGI(地理的表示保護制度)の登録を7月10日に受けたところです。

このGIの登録ですが、花の部門では全国で二例目ということで、大変名誉なことだと思っております。

かすみ草の生産状況ですが、先ほどの4町村の合計で、約26.3ha、昭和村だけだと18haでございます。生産者数が88戸、村内では60戸の農家さんがかすみ草の栽培に関わっ



ておられます。また、平成16年から令和4年までに21戸が新規就農されており、今年度も5戸の新規就農を予定しております。今年度の販売額については、先週の時点で約6億3000万円となっております。

かすみ草のブランド力の強化による生産振興、それから消費の拡大ということで、雪の活用が挙げられます。それまではどうしても厄介者だった雪が、雪室という形で生産を支えている原動力となっており、村としても大変喜んでおります。また、この雪がかすみ草の品質確保とブランド力向上に役立っているということで、放っておけば溶けてなくなってしまうものも、それぞれが知恵を出し合い、倉庫の中で確保することで、こうした資材になっているという新しい発見もありました。

かすみ草農家については、移住定住を契機とした新規就農者の確保、これが村の最大の課題でありました。Uターンはもちろんですが、IターンUターンした方々にはまずインターシップの場として「かすみの学校」で栽培体験をしてもらい、その栽培体験をしていただいた方々に対しては、生産者や関係団体と連携した新規就農の育成ということで、「かすみの教習所」という形で学んでもらうスタイルをとっております。また、新しい方々を迎えるとともに、次世代に対する地域の誇りと愛着の醸成ということで、小中学生の農業体験授業を行い、栽培から流通に関するすべての工程を体験することで村の基幹産業であるかすみ草を学ぶ「花育」という取り組みを実施しています。

この写真は東京の大田市場の青果店で販売の挨拶をしている中学生です。

市場の始まる前に、中学生たちが挨拶すると、その日の販売価格が若干ではありますが上がるそうです。こうしたこれまでの取り組みの効果をまとめますと、まず雪室が稼動したことによる品質が向上し、昭和かすみ草というブランドの確立ができました。販売額も毎年更新している状況です。また、新規就業者の受け入れ事業として、開始以来30組42名の受け入れ、そのうち25組36名が村に残って就農を続けている状況です。直近5年間ににおいては転入超過となり、社会増に大きく貢献している事業となっております。

昭和村は本当に小さな村ですが、そんな小さな村でも自信を持って全国に出荷できるかすみ草があるということに誇りを持つ機会となりました。そして、ふるさとの愛着も醸成していると感じており、将来自分たちが生産者になるという子供たちも生まれてくることを期待しております。

これは先ほどお話しした染めたかすみ草です。かすみ草はドライフラワーにしても大変長持ちする花ですので、1年間通して楽しんでいただけます。皆さまぜひとも昭和かすみ草をお買い求めください。



**参加者**／かすみ草は私が大好きな花なのですが、福島県といますとやはり原発の影響等があったのではないかと思います。かすみ草の栽培には何か影響があったのでしょうか。

**永戸**／幸い私も昭和村は会津地方にありまして、原発の影響が全くないわけではございませんが、かすみ草は食することのない花ですので、その影響はそれほど受けませんでした。むしろ福島県を応援して下さるということで、販売数も伸びたところですよ。

**宮口**／新規就農者も多いわけですが、かすみ草の畑はまだ増やせるのでしょうか。

**永戸**／やはり高齢が進んでいるということで、田んぼをやめる農家さんがいます。そのため、その田んぼが花づくりに向いている場合とそうでない場合があり、その田んぼの選別方法が大変難しいところはありますが、まだまだ増やせる状況にあります。

**宮口**／その一方で辞める人もいるのでしょうか。

**永戸**／新しい方に受け継いで欲しいという思いで、辞められる方も中にはいらっしゃいます。

**宮口**／ありがとうございました。それでは最後になりましたが、ご当地朝日町のノッカーについて説明していただきたいと思っております。

## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

朝日町MaaS実証実験推進協議会  
【富山県朝日町】

畠山／皆さん、こんにちは。ただいま先生からご紹介いただきました「ノッカル」について、朝日町、そして株式会社博報堂、この二つの団体が中心となってやっている取り組みについてお話をさせていただきます。今日はいろんな地方から来ていただいている方、地元朝日町の方、いろんな方がいらっしゃるかと思います。今日はいろんなお立場の方に対し、大変僥倖ながら、我々が今やっている取り組みをぜひ共有させていただきたいと思っております。

昨日の宮口先生のお話を聞かれた方もいらっしゃると思いますが、宮口先生からは「過疎地域は単に困っているだけの地域ではない。美しい自然の中の人の営みは都市にない価値を持つ」、こんなお話をいただきました。今日これからお話しさせていただくのは、一つの小さなプロジェクトのほんの一部でしかありませんが、そのプロジェクトから、昨日の宮口先生のお言葉に通ずるような何かを共有できればと思っています。タイトルは「共助×共創による、これからの公共サービスの実現」としましたが、何のこっちゃということで、要はみんなで作って公共サービスを作っていくよ、そして一人一人が住みたい場所に住み続けられる地域を作っていくよ、ということですよ。

2019年にスタートしたプロジェクトを今日は共有させていただきますが、その前に最近私自身とても胸が詰まったことがあります。地元朝日中学の生徒会の皆さんとお話しさせていただく機会がありました。「君たちさ、日本の未来、みんなの未来ってどうなの。」と話をさせてもらったところ、「うーん、暗い。人口が減る。」と。やっぱりそういった話が、この町の中学校の生徒会からも出てきました。ただですね、もう少し話をしたところ、それって何となくそうなるから暗いよねって言うだけであって、一方で話せば話すほど目は輝いている感じがして、何となく世の中でそう言われているからそう思っている。本質的にはそうじゃないのかなと思いました。冒頭に大将さんが言うておられましたが、やっぱり僕らはそういったことを子供の世代に何となく引き継いでいくのではなくて、本当に今、一人一人が住みたい世の中、住みたい地域社会を作るにはどうしたらいいのか、そんなことを考えるべきなのではないかなと思っています。どんどん大それた方向にいますが、そこに対して現在やっていることを今日はお話させていただきます。

改めて自己紹介させていただきます。畠山洋平と申します。奈良県出身です。東京都世田谷区と、ここ富山県朝日町の両方に拠点を持っております。いわゆる多拠点生活ということを見せていただいております。逆に言いますと、今日は大

変僥倖ながら、都心の顔と過疎地域の顔、私自身は両方行ったり来たりさせていただいておりますので、その視点でお話を共有させていただければと思います。

この写真を見てください。私の子供です。まさに宮口先生がおっしゃった通りですね、東京の世田谷では見せない顔をしています。家を買わせていただいて、ヒスイ海岸でヒスイ探しをして、やっぱり感じるものがあるんでしょうね。僕は何も教えてないです。ただ子供たちを連れてきているだけです。都心は都心で良さはあります。一方で、宮口先生がおっしゃった通り、過疎地域の価値とは何なのだろうかということは子供でさえ自然に感じるものがあるのではないかなと思っています。こうして二拠点生活をしながら、朝日町では「次世代パブリックマネジメントアドバイザー」という役職もいただいておりますので、まさに企業と役所、都心と過疎地域、この二つの軸を持って色々とお話を共有させていただきたいと思っております。

朝日町は人口が約1万1000人で高齢化率45%の町です。2014年に「消滅可能性都市」と言われました。ただし、そこから消えてたまるか朝日町ということで、何となくさっきの人口減少じゃないですが、この町大丈夫かと言われていることに対し、「消えてたまるか」と口だけじゃなく、いろんなことを具体的に動き出されている町です。そしてそんな町が、これから公共はみんなで作っていくじゃないかとチャレンジしている、その中の一つを今日は具体的にお話させていただきます。

ということで、今は役場の立場で申し上げましたが、企業の立場としては博報堂という会社に所属しています。「何で博報堂さんが朝日町にいるの」とよく言われます。なぜ私は家を持っているのだろうか。正直、最初から家を買って朝日町で何かをやると決めていたわけではありませんでした。冒頭、町長からご挨拶いただいたとおり、まさに縁が繋がってできた賜物です。

町に、この後のトークセッションでお話しさせていただく藤野さんが来られ、「日本、朝日町みたいなところでやっていかなきゃ。この町の資産、アセットすごくいいよね。」ということを発信されていました。その中で、藤野さんがされていることに大変共感した当社の社員がいました。私自身は、さきほど皆さんの名簿を見させていただき、行ったことがある地域もたくさんありましたが、全国ものすごい箇所を行脚していました。そんな中、藤野さんがここはと言っていることに共感したその社員から、「朝日町にも寄ってってくださいよ」と言われ、ここ朝日町に来ることになりました。それが素直な理由になります。ただし、そんな町に対して我々としては、企業との付き合いがある方もいらっしゃると思いますが、「生活者発想」という企業の理念があります。人の生活をどう豊かにで

きるか。我々企業も変わらなきゃだめです。変わろうとします。このマッチングがあり、具体的な連携へと進ませていただいたというのが、この町との出会いになります。

こうして2019年から関わりを持たせていただいています。最初から何か大きな目標があって、という話ではなく、具体的に困っていらっしゃる、僕らが考えていること、僕らが外から来て思っていること、そんなことを少しずつ摺り合わせながら、少しずつ形を深めていきました。そしてここでも藤野さんからの大きなアドバイスがありました。目線です。少しずつ具体的にしていくのですが、目線だけは、どっちみち20年後の日本はこの朝日町ようになっていくのだから、町長も仰っていますが、朝日にいて朝日のことを考えるだけではなく、朝日が日本の世の中のお手本になっていこうじゃないかと。その目線だけは下げずに、だからといって、大きなことだけ言うのではなくて、具体的にやっけていこうよと。そういうことで、朝日町と博報堂は連携してやってきました。こうやって総務大臣賞をいただき感慨深いですが、これでも正直まだまだだと思っています。

まだまだではありますが、ここからは地域交通「ノッカル」をどうやって作って、どんなことが学びとしてあったのか、その辺りを具体的にお話しさせていただきます。ノッカルは皆さんの市町にもあるような話です。私は奈良県出身ですが、ご近所さんの車に乗せてもらうということはありました。地域社会、過疎地域のどこでもある話で、それをシンプルにただ形にただけになります。まずは1分程度の動画がありますのでご覧ください。

～動画放映開始～

『運転免許返納数が増加し、地方在住者の多くが将来の移動手段に不安を抱えている、公共交通インフラの維持が地域の共通課題となっています。ノッカルは住民、自治体、交通事業者がみんなで作る交通サービス。マイカーを持つ人の自宅と中心部の行き来を活用します。住民ドライバーが出かけるついでに、近くに住む利用者を自分の車に乗せる。地域住民同士が助け合う仕組みです。

ドライバーが自分のお出かけ予定を登録するとノッカルに反映。利用者がサービスを使いたいときは乗りたい時間を選んで予約します。乗る場所は利用者の自宅住所から最寄りの位置に自動的に登録されています。予約当日、ドライバーは出発前にその日乗せる人と場所確認して出発。利用者は指定の時間に乗降場所へ。車が到着し、お互いが確認できたら出発。降車地点で利用者を降ろしたらドライバーはそのまま自分の目的へ向かいます。乗りたい時間に予約できなかったらバスやタクシーをご案内。万が一のときにも安心の保険付きです。ノッカルは地域の交通インフラを維持し、住みたい

ところに住み続けられるコミュニティを実現します。「気軽」「手軽」「みんな助かる」ノッカル。

～動画放映終了～

これが「ノッカル」の簡単な仕組みになります。要はご近所の思いやりを、繰り返しになりますが、形にただけで、日本一温かい行政サービス、これを目指しております。ただ単にスーパー行くから誰が乗っていくか、ということだけです。ただし、これ自体も最初から決まったわけではないです。協議会を組んでみんなで話し合っ、ただ話すだけではなくて、私自身もスーパーや病院ですとか、いろんなところで住民の方とお話させていただいて、いろんなご意見が出ました。

さらに当時はコロナ禍が始まった頃でしたので、実際に「人に会えないんだけど」とか、「実は出かける機会がかなり減っちゃって」といった色んなお話を聞いていく中で、地域の支え合い、コミュニティ、この辺がすごく大きな課題になっているのだなと感じ、何となくそこに答えがあるのではないかと思いました。こうして色んな方の課題、声を聞いて作ったのが「ノッカル」です。そしてここがさらにポイントなのですが、共助、共創といいました。住民もそうなのですが、地元の事業者、地元のタクシー会社とも一緒にやっております。

事業者協力型の自家用有償旅客運送は全国で第1号認定をいただいているのですが、これもそれが欲しくてやったわけではありません。当たり前ですよ。地元のタクシー会社さん、地元の事業者がこれまで地域の交通を支えてきたわけですから、その人たちと一緒にやろうじゃないかという話です。

じゃあどうやったのか。この辺はただ単に、こんなことあったらいいね、あんなことあったらいいね、だけじゃなくて、きちんと法律に則って、じゃあどうすればいいのか、どこにポイントがあるのか、何を確認しなきゃだめなのか、その辺をしっかりと設計してきました。安全安心のための講習を開かなければだめなのではないかということで、2種免許がない方には講習するですとか、そうした一つ一つを丁寧に紡ぎながらやってきました。

実際こんなものを作っても、住民の方、町民の方が使わないと意味がありません。デジタル社会と言われていますが、それだけではなく、アナログで使える部分、具体的にいいますと、バスに乗る際住民の皆さんはバス券を使っておられますのでそれをそのまま使えとか、色んなものをスムーズに、馴染むように、どうできるかということを考えながらやってきました。具体的な仕組みについては以上のとおりなのですが、これからの公共づくりの大きなポイントが2つあります。一つは、コストです。結局どんなにいいものであっても最初にドンと作っては持続しないのではないかと思っています。



## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

ですので、この「ノッカル」を作る際は、できる限りありものを使う、余計なものを作らないという前提で進めました。そして我々のような外部企業が、これとこれならこう使って、と僭越ながら編集させていただきました。これはなかなか町の中だけではできないのではないかなと思います。

一方、外部企業だけでもできません。なので、両者が一緒になってありものをできる限り運営していく。例えば「ノッカル」が生まれた原点はバス3台、タクシー10台、車8,000台の社会です。そこにまた新しいモビリティを作って、それがどうなるか分からないという負担を抱えるのではなく、今ある車が役に立ってほしいじゃないか、そんな話です。さらに住民目線に立った時には、新しい「ノッカル」モビリティができた、そんな話ではなく、バスと同じような時刻表の形にすれば使いやすいのではないかと、とにかくコストがかからないように、ありものを活用しようという話です。

そしてこれはコストオペレーションの話だけではなく、住民の皆さんの気持ちも同じです。誰かのためにやってあげてもいいよという、そんな地域にある、過疎地域には絶対あると思います、そういう人の気持ち、それを使っていこうじゃないかという話です。こうした人の気持ちは、過疎地域であっても何かきっかけがないと中々共有しづらい世の中になりだしているのではないかなと思います。そのため、そのきっかけを作ることができれば、こうして「だったらやってあげるよ」という気持ちが形となって現れるのではないかなと思います。

これまで事業を行ってきている中で、事故はなく、運転技術に対する不満もありません。何より現在1運行200円でやっていただいておりますが、要は人のために、ご近所さんのために何かやってあげるよということまでできています。そのため、料金を少し上げてもらえないかといった話は出てきていません。新しいことを新しい人が勝手にやったのではなく、地域にあるアセット、地域にあるものを使って新しい公共交通を作った、新しいことを地域にあるもの、地域の皆さんの気持ち、地域の皆さんとともに作った、それが「ノッカル」になります。

地域交通「ノッカル」から始めた、地域交通の目指すべき方向の一つはこういうことではないかなと思ったのがこの図になります。共助共創、みんなで助け合おうという概念はみんなが共感できると思うのですが、公共サービスは、正直誰かの負担に偏り過ぎています。今日お話しされた皆さんはすごく思いを持ってまちづくりをされている方だと思いますが、そういう思いを持った誰か1人がいる、では続きません。やっぱりみんなでどうやっていくかというのが公共サービスではポイントになってくるのではないかなと思っています。今どうでしょう、本当に一人一人、都市なんかもそうですが、自己責任の時代になってしまっていると思います。誰も守ってくれな

い。企業に入ってもそうです。終身雇用なんてないですし、給料がどうなるか分からない。明日も分からない。そんな今までと全く違う、そうなると思うと全部自分で何とかしなきゃダメなんだ、という世界になっていると思います。それだからこそこうした公共サービスはみんなでやる唯一最大のチャンスだと思います。みんなで助け合うという機会を失っていくと、日本の社会構造上も、宮口先生がお話されていた視点に立った時にも、どうなんだろうと思ってしまいます。

最後になりますが、改めて昨日の宮口先生のお話で締めたいと思います。「過疎地域が豊かな少数社会に置き換わることが、国への最大の貢献。」まさに今日お話ししたお互い様、おせっかい、これはどこの地域にもあると思いますが、こうしたみんなで助け合う豊かな気持ちを作っていく、そんな少数社会が今の日本に必要なだと思います。朝日町はこのまま突き進んでいきます。そして、過疎地域から皆さんとともに、これからの国の未来に貢献できればと思っています。以上です。ありがとうございました。

**宮口**／話がずいぶん広がりましたね。「ノッカル」のことがちゃんと伝わりましたでしょうか。それでは質問がある方はいらっしゃいますか。

**参加者**／僕が目指す地域公共交通、地元の移動支援に関してはこれが理想像だと思っています。その中で自分自身すごく悩んでいる部分があって質問させていただきます。お話の中でもあった、みんなで共有しながら地域をつくっていくという考え方が非常に大切だと思っていて、私自身も移動支援タウンミーティングや、みんなで議会とって予算を先に皆さんにご説明した中で皆さんどのように考えているのか、みんなで予算を考えていこうよ、という取り組みをしているのですが、どうしても自分事にできない方が多く、参加者数がどうしても少なくなってしまいます。実際この「ノッカル」というシステムにどれくらいの方が登録していて、自分事になかなか踏み込みにくい方々をどのように取り込んでいったのか。何か工夫しているところがあれば教えていただきたいと思っています。よろしく願います。

**畠山**／確かに仰るとおり地域の方が自分事になっているかどうかという話はよく出るのですが、みんな自分事としてやってきましょうよと言われてたところで結構難しいと思います。自分に置き換えて考えてもそう思うので、無理のない範囲できっかけを作ることが重要だと思います。「ノッカル」だけで地域交通をすべて賄う必要はないので、そうしているんな機会をつくり、それを紡いでいくことができれば、その結果として、まちづくりに参加しているなと感じられる、そんなことでいい



んじゃないかなと思っています。一方で、そのきっかけをちゃんと見える化することも必要です。議論するだけでなく、小さくてもいいので、少しずつ実態があれば、この町もまだ全然スタートしたばかりですが、色んな公共サービスを同じ考え方で動かし始めているので、結果それがどんどん繋がっていき、最終的にみんなでやっている状態になるんじゃないかなと思っています。

**宮口**／ありがとうございます。ほかにございますか。

**参加者**／公共サービスや移動サービスはいろんな自治体でいろんな政策をやっていて、そこにかなりの税金がつき込まれています。それにも関わらず、使う人はものすごく便利に使うけれども、何か使いづらい、自分の行きたい時間に行けない、スマホを使うことがネックになって使えないといった声もたくさんあり、使わない人にはどんな説明をしても中々そのハードルを乗り越えることができない、という状況が多く起きていると思います。そうした場合に、自分が今日行きたいということではなく、明日のこの予定に組み込みましょうということなどをどのように話をしていくと使ってもらえるようになるのか。結局使ってもらえない人にはどんなサービスをしてもらえないのですが、その辺りの気持ちのほぐし方とございますか、アプローチの仕方というのは何か考えられていますか。

**畠山**／まず前提としてすぐに結果が出るものではないと思っているので、粘り強さというのがまずは前提になります。さらに粘り強くやる時に二つポイントがあって、一つは新しい公共交通サービスが何かすべてを変えるわけではないので、地域の中でもいろんな新しい、ユニークな取り組み、交通でもいろんな事例あると思うのですが、地域にある交通全体をどう見るかという点で考え、全体の中での運営をしっかりやっていくことだと思います。バス、タクシー、ノックル、いろんな手段がある前提で共同運営していく。だからこそ、バスで使っている紙チケットが「ノックル」でそのまま使えるというアイデアが実現できました。このように全部を繋げ、オペレーションは住民側もやっていく。それがじわじわ広がって、最終的にデジタル化に繋がるよう設計していくしかないと思っています。「ノックル」には結果的にまだ紙媒体や電話もありますが、その電話も利用してもらえないからといって単に設置するのではなく、タクシー事業者のオペレーターの方にそのまま、業務のついでにやってもらうことで、そこにアナログのコストがかかっていません。とにかく全部を俯瞰で見ながら、できるものから実行しつつ、急にこっぴどいという話を指し示すのではなく、本当に粘り強く、ゆっくりやるしかないと思います。ただ、

そうしていけば、いずれいろんなものが繋がっていく、間違いなくそうなっていくと思っています。単一のサービス、もので語らない方がいいのではないかなと思っています。

**参加者**／ありがとうございます。もう1点あるのですが、粘り強くと言われたことについて、誰が誰にアプローチしていくのか。人と人とのコミュニケーションじゃないですが、こんなサービスがありますよ、使ってみませんかというのは、誰がアプローチされているのでしょうか。

**畠山**／それはうちの社員もですが、役場職員もそうですし、地域おこし協力隊の方もそうです。とにかくいろんな立場の人たちがやりました。ただ、一つポイントは、行政だけがやっていくとなかなか、「あんたらやってくれよ」ということになると思います。やはり小さな町だと行政がいろんなものを背負っているのです。一方でそこが僕らだけでももちろん「お前ら何がしたいんだ」という話になります。いろんなやり方があると思うのですが、やはりまずは色んなところへみんなで話しに行かないと進みませんし、話す人もいろんな人が行くしかないんじゃないかなと思います。そしてそれが今後に繋がっていくと信じて、今もやっているという状況です。

**参加者**／先日熊本県の荒尾市のおもやい (OMOYAI) タクシーという、AIデマンド交通を視察させていただいたのですが、スマホのアプリが使われておりました。しかし、実際使われているのは電話が9割で、スマホアプリは1割ということでした。ただ、私のまちと大きく違うのが、市内にショッピングモールもあるし、病院もあるし、荒尾市から出なくても大丈夫というところでした。私の町が抱えている問題は、町内には病院やショッピングモールがなく、隣町に行かなければ何もできないというところで、役場には広域協定を結んで、隣町に行かせて欲しいという声が大きいです。そのハードルがなかなか超えられないというところがあります。今日のお話を聞いていると、例えば地域通貨という考え方もあって、お礼を地域通貨でやるとか、あるいは除雪作業をしてくれたらそのお礼も地域通貨でする感じなのかなと思います。本当に基本の基本、お互いで助け合うという一番大事なところをここはされているのだなということが伝わってきました。他の市町村からの旅行者も使える交通体系なのでしょうか。

**畠山**／今は使えないです。使えないです。まさにいろんな国の話もありますが、旅行者と生活交通というのは全く競合が違うと思っています。大都市と地方でも違いますし、旅行者と生活交通というのは全く種別が違うので、現在は生活交通ということでやっています。

## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

**宮口**／今日は「特定非営利活動法人本と温泉」による本を通じたまちづくり、「家賀再生プロジェクト」による小さいグループの藍による集落再生、「昭和村」による村をあげてのかすみ草栽培、「朝日町MaaS実証実験推進協議会」による空白地域での交通手段である「ノッカル」について発表していただきました。

最後の発表は「ノッカル」についてやや分かりづらい部分がありましたが、大事なことはバスの通らない、バス停から遠い人が近くのドライバーに「病院へ連れて行ってね」とかそういうことでしょうか。ひとつ聞きたかったのが、日本で初めて交通事業者を巻き込んだ地域交通ということで、日本で初めてということは行政のハードルがあったと思いますが、その辺はどういったやり取りがあったのでしょうか。

**畠山**／国交省による事業者協力型の自家用有償旅客運送の第一号となりましたが、元々そこを目指していたわけではなく、やるべきことを紡いだ結果そうになりました。

国交省本省ともかなり具体的なやりとりがありました。例えばドライバーさんのアルコールチェックをどのようにするのか。細かい文言でいいますと、ルール上遠隔点呼ができるのかどうなのかという問題について、一つ一つ条文を読んでいき、いかに利用しやすく、かつ法律を遵守しつつという部分で、具体的にはどういった形が可能なのかという踏み込んだ話を国交省本省並びに運輸支局と行いました。

結果的に一緒になってルールを作ることとなり、まさに第一号、最初の生みの苦しみを国交省、運輸支局とともに経験しました。

**宮口**／バス会社やタクシー会社と一緒にあって議論する機会はあったのでしょうか。

**畠山**／何度も議論しました。何よりもまずタクシー会社さんがこれまでの地域交通を支えられてきていますので、何度も通い、実際の運行の実態をお伺いしました。そして実態を聞いていきますと、実はタクシー会社さんからしても、この地域の人は全然使わない、この距離では全然タクシーを使わないといったことがあり、そうした話も大きなヒントになりました。やはり地元の事業者さんがこれまでの交通については熟知されていますので、そうした話もヒントとしながら、一緒にどうやって町の移動全体を守るのかという共通の目標を掲げて進めました。

**宮口**／どうもありがとう。全体のやりとりを聞いて、会場からは質問ありませんか。

**参加者**／先ほど質問があったようにいろんな先進地でそれぞれ取り組まれていると思うのですが、僕自身感じることで、どこかの地域で実践されていることを自分の地域に置き換えてもうまくいったことがほとんどなく、やはり持ち帰っても自分たちで考えなければいけないと思っています。そこで、皆さんは自分たちはゼロから一を作ったタイプなのか、それとも何かを参考にされて取り組まれたのかお伺いさせていただきます。

**枋谷**／家賀再生プロジェクトの場合、本当に初めてのことをやってきました。ちょうど世界農業遺産に認定された年だったこともあり、藍を植えてみようってということになり、真似をしていないために大変だったところもありますが、いろいろ地域の人に聞きながらやってきました。

**宮口**／最初は誰が誰に藍を植えてみてはというアドバイスをしたのでしょか。

**枋谷**／世界農業遺産の認定に尽力された忌部文化研究所の先生から、かつて藍の栽培がおこなわれていたので、もう一度再興できないかというお話がありました。

**宮口**／今グループは何人で活動されているのですか。

**枋谷**／家賀再生プロジェクトのグループ自体は10名ですが、素晴らしい地域、活動だといろんな方に参加していただいています。今度のカヤ刈りも50人集まってくれたいということと、サステナブル戦略や自然農法に興味のある方が集まってくれている状態になりつつあります。

**永戸**／先ほども少し申し上げましたが、かすみ草の栽培でいいますと一軒の農家さんから始まっています。その取り組みが昭和村の気候とマッチして、そこから広がっていきました。そういう意味では、葉たばこからの転換期が一つのきっかけになっているかと思います。

**畠山**／私たちの取り組みですと、当然世界や日本で起きているMaaSの事例については一生懸命勉強しました。一方、それを勉強しつつも、実際作っているものでいうと、昔からある「誰か乗せていってあげるよ」という話を形にただけです。何かこう真新しい話ではなくて、大局的に起こっていることを学び、そこでの課題を把握しつつ、具体的にやっていることは元々ある日本の助け合いを形にただけになります。

そのため、実はこのノッカルみたいな話は他の地区、例えば

富山県の高岡市ですとか他の市町村でも始まっているところですよ。

**参加者**／あと一点お願いします。こうしたことをやっていこうとすると、どうしてもできない方向にばかり言ってくる人がいて、例えばここがダメ、ここはダメじゃないかとばかり言ってきて、やるという方向に踏み出せないパターンも多いかと思うのですが、そういったところをどのように乗り越えられたのか教えてください。

**永戸**／私たちの村でもやはり稲作農家さんの中には「かすみ草にばかりなせ村は力を入れるのか」と言われる方もおられます。しかし、やはり百年産地を目指していくことをコンセプトにしているので、先ほどお話もあったように、粘り強く発信していくことが大事ななと思っております。

**畠山**／コロナ初期にやっていたので、人の車はダメじゃないのかという話がありました。ただ、本当に困っていらっしゃる方がいらっしゃるの、もう動き出さない限りは難しいということで進めていきました。あともう一つ、これこそ官民連携の話かなと思っていて、官の力学と民の力学は全然違うのですが、そこが一緒になってどうできるのかと、ここはリスクあるよねという話をしたり行ったりきたりしながらやるということ自体が、できない理由を探すのではなくて、どうできるのかという方向に向かえたということではないかなと思ってます。

**宮口**／よろしいでしょうか。時間がきておりますのでまとめの発言とさせていただきます。

今日は四つの団体より発表がありました。それぞれ違うタイプということで、それぞれについてコメントさせていただきます。

まずは「特定非営利活動法人本と温泉」ですが、城崎温泉をテーマにした本をすでに4冊書いていただいております、非常にユニークなアイデアで、そこまで世間には聞こえていませんが、結果的にはかなりの数が売れているということで、できれば名の通った人を書いてもらえないかとかですね、難しいかもしれませんが、年に1冊ぐらいを目標に今後も活動いただければ話題にもなるのではないかと思います。城崎温泉には私も夏に視察で行かせていただきましたが、浴衣で歩く人が多く、温泉の街並みは日本でも一二を争う雰囲気があります。いい温泉街だと思います。ぜひ今後の展開に期待したいと思っております。

次に「家賀再生プロジェクト」ですが、外から見ていてこのまま荒れるのはもったいないと感じた人たちがグループを作っ

て藍栽培を始められました。ただ藍栽培だけではそこまで収入がないということで、今は働きながら余力をもって栽培をしておられる方が多いということです。今後は藍栽培で生計を立てていこうという方が出てくるといいなと思います。

あとはあまり地元のパワーが感じられない、そういう難しいところで頑張っておられますが、これからは地域の人でリターンして頑張ろうという人が出てくるような展開になっていくといいなと思います。

私もお邪魔したことがあります、すごい斜面でうまく作れば美しい畑になります。

そして「昭和村」は村をあげてかすみ草を栽培し、それからからむしという植物を使った大変手間のかかる織物を作られており、かつてはその織姫を募集し、結構定住されておられるということで、こちらでも過去に表彰したことがあります。山の中の村ではありますが、一つのものに注力して世の中に売り出すという方法で頑張っておられ、そして新しく就農する方も新たに獲得されているということで、村としての意欲や世の中へのアピールがかなり上手くいっている結果ではないかと思っています。量的な限界はあるかと思いますが、頑張っていたきたいと思います。

それから最後の「朝日町MaaS実証実験推進協議会」のノックカルについては、バス停から遠い人が近くのドライバーに病院やスーパーといった目的地まで乗せて行ってもらう。そうなる就先ほど質問がありました、欲が出て隣の町まで行けないかとなりますが、そういうことは考えない方がいいですね。今できる、今必要なことをきちんとやると。これは大事なことで、朝日町がきちんとやっておられます。交通関係では事業者の権利を守るため様々な規制があり、町のバスを走らせるのも中々難しいのですが、その部分についてうまくタクシー、バス事業者を巻き込んで制度、システムを作ったということに大きな価値があります。このまま継続していただければいいなと思います。

以上4つの団体の皆さんに発表いただきました。今回受賞された皆さんにはぜひこれを励みに、ますますパワーアップしてがんばっていただければと思います。どうもありがとうございました。

## 第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会





# スペシャルトークセッション 「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住み

## 登壇者

### 藤野 英人 氏

(一社) みらいまちラボ合同代表、  
レオス・キャピタルワークス株式会社 代表取締役会長兼社長 CEO&CIO

1966年富山県生まれ。1990年早稲田大学法学部卒業、野村投資顧問入社。96年よりジャーデンフレミング投信・投資顧問(現JPモルガン・アセット・マネジメント)、2000年よりゴールドマン・サックス・アセット・マネジメントにてファンドマネジャーを歴任。特に中小型株および成長株の運用経験が長い。2003年独立し、レオス・キャピタルワークス株式会社を創業。投資教育にも注力しており、東京理科大学上席特任教授、叡啓大学客員教授、淑徳大学地域創生学部客員教授も務める。近著に『プロ投資家の先の先を読む思考法』(クロスメディア・パブリッシング)『投資家がパパとママに伝えたい たいせつなお金のはなし』(星海社新書)などがある。2020年12月に朝日町特命戦略推進監就任。



### 畠山 洋平 氏

朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー、(株)博報堂

2003年(平成15年)4月 株式会社博報堂入社  
2012年(平成24年)10月 博報堂従業員組合 委員長  
2019年(平成31年)4月 第五営業局 部長  
2021年(令和3年)4月 第二MDコンサルティング局 局長代理  
2022年(令和4年)4月 朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー就任



**司会**／これよりスペシャルトークセッションを始めさせていただきます。

本日は、一般社団法人みらいまちラボ合同代表で、レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長CEO&CIOの藤野英人様にお忙しい中、このトークセッションのためご来町いただいております。

藤野様は、富山県にお生まれになり、早稲田大学法学部をご卒業ののち、国内・外資大手資産運用会社でファンドマネジャーとしてご活躍され、2003年にはレオス・キャピタルワークスを創業していらっしゃいます。2018年には、ここ朝日町において古民家を購入され、その古民家を拠点として「一般社団法人みらいまちラボ」を設立。地方創生に関わる勉強会を開催されるなど「地方から日本を元気にしたい」との思いで地方の経営者や自治体の方々と連携され、地域活性化に向けた取組みに尽力していらっしゃいます。また、朝日町特命戦略推進監として朝日町に様々なご縁をつないでいただくとともに、多くのアドバイスをいただいております。

本日は、先の優良事例発表において、「朝日町MaaS実証実験推進協議会」の取組みについてご発表いただいた朝日町パブリックマネジメントアドバイザーで、株式会社博報堂の畠山洋平様と『富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人

ひとりが住みたい場所に住み続けるために～』と題してお話をいただきます。それでは藤野様、畠山様よろしくお願いたします。

**藤野**／こんにちは。レオス・キャピタルワークスの藤野です。本日は富山県朝日町において、このような場でお話できることを大変光栄に思っております。

今日は畠山さんと一緒に、さらに「朝日町MaaS実証実験推進協議会」の取組みや朝日町での取組みについていろいろお話していきたいと思います。先ほど宮口先生の方からもノックルの説明が足りなかったのではとご指摘がありましたので、ノックルについてさらに畠山さんに聞きながら話をしていきたいと思います。よろしくお願いたします。

まず畠山さんにお聞きしたいのが、朝日町に来て、今どっぴりここで仕事されていると思うのですが、いろんな地域を回りながら、ここに半土着した理由は何だったんでしょうか。

**畠山**／先ほど少しお話させていただきましたが、僕自身は全国いろいろ回っていた中、藤野さんが博報堂の社員である野口真理子さんと一緒に朝日町で活動されており、その野口さんから「畠山さん、朝日町が今おもしろいです。藤野さんという人がものすごく朝日町に興味を持っていて。」と聞

## 「たい場所に住み続けるために〜」

いたのがきっかけです。まさに藤野さんがきっかけです。なので逆に藤野さんがなぜ朝日町なのか教えてもらえますでしょうか。

**藤野**／そうなんです。私は富山県富山市生まれなので広い意味では富山県には縁がありますが、元々朝日町に縁があったわけではありませんでした。

ここに実は来てらっしゃるのですが、地域の起業家で家印株式会社の方の坂東さんという方が、直接会ったこともなかったのですが、何度も何度も「藤野さん、朝日町でまちづくりのお手伝いをしてください」とFacebookのメッセージをたくさん送ってこられたことがきっかけでした。最初はやたらしつこい人だなと思っていたんですが、5回も6回もメッセージ来るようになると、だんだん来ないと寂しくなってくるんですね。そうした中、私が富山県で講演する機会があった際に坂東さんが直接来られ、名刺交換をして、さらに、朝日町ですごく有名な富山県の起業家や経営者の方を呼んでパーティーをするので藤野さんも来てくださいと言われ、行かなきゃいけないような状況が作られていきました。そして朝日町に行ったら大歓迎され、だんだん彼らの情熱にほだされていきました。また、畠山さんと一緒に、普段いろんな地域と関わっている中で、総論的に話をするよりも自分もどこの地域で活動して汗かくことが必要だなと、そうして自分の目で見ないと地域のことが分かったとは言えないとも感じており、そのためには地域に根付いている方と一緒にやる必要があると思っていたことから、坂東さんとパートナーシップを組むことになりました。そして「分かった、坂東さんの情熱に負けた。じゃあ一緒にこれやろう」となったところ、坂東さんから待ってました「じゃあ僕が用意していた空き家があるんで買いませんか。」という話があり、なんだ商売かよとも思いましたが、ノックルではないですが、それに乗っかってここまでできました。

乗っかることはとても大事で、ノックルという名前もすごいんですよね。いろんな人の情熱や夢を乗けていくということが、ノックルという言葉の中に入っていますよね。当然車のサービスだから乗るという意味がありますが、ノックルの中にはいろんなイメージがあって、僕もさっき言いましたが、朝日町に乗っかりました。朝日町に乗ったところ、坂東さんのほかに笹原町長がいました。この人もすごい人で、すごく明るい前向きだし、いろんな仕事もされていて、こういう町長や地元の人と一緒にやったら面白いんじゃないか、そう思い、この地域に古民家を買って、その古民家を拠点に活動を始めました。ただ、すごく大事なことがあるんです。何かというと、地域の中でありがちなのですが、富山県を良くしたい、朝日町を良くしたいって思いますよね。これは大事なこ

とだと思います。また、今回はいろんな地域の方に来ていただいて本当にありがたいことだし、皆さんは地域を良くしたいという気持ちが地域の中でトップクラスの方だと思います。さきほどの質問も的確な質問ばかりで、地域を良くしたいという情熱に溢れていました。ただし、すごく大事なことがあるんです。何かというと、朝日町を良くしたいと言うと皆さん誰も反対しないですよ。「おう、朝日町を良くしたいのか。そりゃそうだよね。君たちの町だから。頑張るね。」で終わってしまいます。なぜなら自分事じゃないから。つまり、地域の課題解決というのは、その地域の人にとっては重要でも他の地域の人には関係ないんですよ。朝日町を良くしたいと言うと「頑張るね。」で終わりなわけです。だから私は坂東さんや町長に「僕もこの地域で何かが良くなるように頑張りたい。でも大事なことは朝日町を良くすることじゃなくて、朝日町を通じて富山県を良くする、もしくは朝日町を通じて日本を良くするというような目線がないとダメなんだ。」ということをすごく言いました。そしてそんな目線で勉強会をしたところ、朝日町から富山県を良くする、朝日町から日本を良くするための勉強会だと言うと、全国から人が集まってきました。そうして集まった中のお一人が博報堂の野口さんで、今度はその野口さんが来られたことによって畠山さんが朝日町に来て、そしてノックルというサービスを始められたと。これこそ人の縁が繋がっていることの証だと思うんですね。そこで聞きたいのですが、朝日町に来られたきっかけは私や野口さんだったわけですが、それでも別に朝日町を通過することもできたと思います。なぜ乗ったのですか。

**畠山**／まさにわらしべ長者のように縁が繋がって行って、また、町長が課題にオープンだったことも大きい理由ではあります。ただ、それ以上に、この会場にも行政の職員の方もいらっしゃると思うのですが、行政の職員、具体的に言うと朝日町役場の寺崎さんと地域おこし協力隊の小谷野くん、彼らと「実はこんなことがあって」とか「お互いこうやった方がうまくいくよね」といった課題や意見の共有ができて、よくある、いわゆる官民連携ではなく、そうした現場の部分での手ごたえ、歯車がガチっとはまる感覚があったことが一番大きかったと思います。正直に言うと企業が町長と会って、そして連携する、という話は全国どこでもあると思います。ただ、実際の現場部分でガチっとはまる感覚があったことで、ここで本当に何かやれるのではないかと感じる事ができた。そこが大きいですよね。

**藤野**／朝日町が消滅可能都市になったというところで、町として頑張らなきゃいけない風土があったことも大きいですよね。それがあって結果的に縁ができたと思います。一方、実

際にノックルのサービスを始めて、当初利用者が少なかったりと、特にコロナ禍の真っ只中でいろいろあったと思うのですが、それを乗り越えられたのは何か理由があったんでしょうか。

**畠山**／まさに繋いでいくというのはこういうことだと思うのですが、地域交通というのはこれまでも誰かが考え、そして続いてきています。朝日町においては「あさひまちバス」というものが、富山大学の中川先生に入っただきながらしっかり運営されてきていて、これまでも新しいことにチャレンジしてきた歴史がありました。そんな地域交通を存続させるために取り組んできた歴史があったので、町側にはそうした利用者が少ない状況にも耐性がありました。ただ最初は全然利用者がいなかったで、正直僕らは民間なので焦りました。「これはやばい、誰も使わない。」と。

**藤野**／ですよ。最初は利用者が少なかったと聞いていたので。その状況からよく巻き返しましたよね。すごいですよね。

**畠山**／町としての耐性があって、町長からも「こんなものですよ。まあこうしたものはゆっくり時間かけてやりましょう。」と言われました。

**藤野**／町長や町の人たちもよく我慢しましたよね。

**畠山**／本当にそう思います。そこが、我慢という言葉を使いき使いましたけれど、やっぱりこうしたものは最初から広がるものじゃないので。ただ、少しずつ広がっていくと、結局地域社会において重要なのは口コミなので、「あなたもやってみなさい」となっていく。そこがポイントになります。そこに乗せるまでゆっくりじっくりと、粘り強く取り組むことが重要なと思っています。



**藤野**／個人的にはよくそこで耐えられたと思うんですよ。会社としても地域としても最初にロケットスタートできれば前がかりに進められると思うのですが、なぜ粘り強く取り組むことができたのでしょうか。どこからいきましょ。

**畠山**／そうですね、ただ、やはり企業が事業を行うには企業なりにきちんと大きなロジックを立てる必要があります。そうしないと企業なのですぐに具体的な成果を求められます。その原則があるのでそこはきちんとその大きなロジックを説明して会社を納得させて、ただ自分個人としてやりたいという思いがあったので、1つだけ諦めたのは初年度2年度の私のボーナスです。ボーナスは激減しました。成果が出ていないのでそこは諦めました。

**藤野**／すごいですね。普通2年間ボーナス出ないときついですよね。

**畠山**／ちゃんと出てはいます。

**藤野**／でもすごく減ったということですよ。

**畠山**／そこは自分で納得してそうしたので。それよりも会社として事業を継続させることを優先させて、それが今この町に社長が何度か来させていただいていることにも繋がっていると思うのですが、それがすごく大事だったかなと思います。

**藤野**／でもそうやって継続できているとはいえ、先ほどの優良事例発表のときの質問も痛いところをついたと思うのですが、みんなが知ってるわけじゃない中で、じゃあどうやって利用促進するのかということはまだ課題ですよ。

**畠山**／課題はありますね。

**藤野**／先ほど質問の際も回答いただいたように粘り強く、あとは関係者とコミュニケーションを取りながら一体となってやるしかないということだとは思いますが、とはいえ焦る気持ちはないですか。

**畠山**／今はもう全くないですね。

**藤野**／それはやっぱり利用が増えて浸透してきたからですか。



## スペシャルトークセッション 「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

**畠山**／ノッカル単体に限ればまだまだ焦りはありますし、本当にファーストステージが終わったぐらいの状況で、まだまだ頑張れる余地があると思っています。ただノッカル以外も含めた公共サービス全体で見れば、ゆっくりですが着実に動き出したなと思っています。

もちろんまだまだこれからの部分も多く、今日のこうした場に町民の皆さんが来ていただいているのもありがたいなと思います。こういう機会を通じてまたじわじわと広がっていくのではないかなと思っています。

**藤野**／私がいつも町長に「過疎の町だからできることってあるよね」ということをよく話しています。それは何かというと、過疎の町だからこそ実験ができるよね、ということで、人が多い地域だと何をやるにもたくさん調整が必要だけれども、過疎を逆手にとって実証実験ができる、実証実験の町だということを積極的にPRしていけばできることがあるはずだと。民間企業の中には投資としてどこかの地域で大規模な実証実験をやりたい、そして実績を作りたいところがいっぱいあるんですね。そうすると、あとは行政側がやるという意思を示せば、できることが結構あると思います。だから、実証実験をしていると捉えることがすごく大事で、朝日町も実証実験の町とまではいってませんが、実際教育分野においてもICT教育に関しては日本トップクラスで、先ほど教育長にも聞いたのですが、ChatGPTを使った教育というものを含めて今後文科省と相談して組み込んでいく予定だということで、人数が少ないからこそできるっていうところがすごくいいなと。そして富山県も朝日町でやったことを、この地域だけじゃなくて、この成功例を大きく開放して他地域に繋げていくということが大事で、先ほども少し話が出ていましたが、実際高岡市で始まっているそうです。どんな手ごたえですか。

**畠山**／まずは横展開の話になるのですが、今ほど藤野さんの実証実験の話について、まさに仰るとおりで、僕もこの町に入ってまずは実験をしようと思っていました。ただその中で僕たちが学んだことがあって、実験と言いながらもそれによって人が生活リズムを変えているわけですね。

**藤野**／そうだね。ただの実験じゃなくて実際にやるということだからね。

**畠山**／その事実に対峙したときの我々企業、よそ者の使命っていうのはそこでかなり変わって、単純に「いい実験になりました。ありがとうございます。」だけで終わってしまっただけは何も成さないなと。実装することが必要だなと。

**藤野**／実験でなく実装ね。

**畠山**／そこまでやり切らない限り僕は人の役に立ち続けているとは言えないので、そこがまず大事で、そこを経験した後には他の自治体で展開できれば、地域によってかなり課題は違うのですが、やり切れるのかなと。企業側も実験とだけ考えていると、少し経つと地域から出て行ってしまうので、企業側の変容といった視点も必要じゃないかなと朝日町を通して特に思いましたね。

**藤野**／畠山さんだからこの地域に突入して行って、ボーナスも激減しながら、これまでやり続けたわけだけど、でもそこに何か面白さとかやりがいがあったら続けられなかったと思うんですね。どこにそれがあったのですか。

**畠山**／やりがいが一番ですね。40を超えたから分からないですけど、やっぱり人の役に立つ、誰かの役に立つということが最大の喜びですし、こうして顔を知っているいろんな会社もどんどん増えてきて、誰のためにやっているのかが見えることが大事だなと感じます。どこまでいっても企業ばかりで、そこが特に東京だとよく分からなくなるんですが、ちゃんと誰の何のためなのか分かればやりがいにも繋がります。ただ朝日町も東京も両方必要だと思っていて、その両者がきちんと回っていくことが最大のやりがいだと感じています。

**藤野**／地域課題の中で地域交通をどうするかというのは今非常に重要で、特に先ほどの優良事例発表の質疑の際、生活交通と観光における交通は別物だという話もありましたが、今その双方において地域交通が壊れ始めていて、特にコロナ禍後の人手不足やインバウンドの急増に耐えられないということがあって、ライドシェア導入というも国の課題になりつつあります。もともと一部の議員が言い始めていたのが、先日の首相の所信表明演説の中でもライドシェアが取り上げられ、朝日町はこのライドシェアという観点からも全国的に注目されつつあると思うのですが、今このライドシェアの議論を、先行してやっていた人として畠山さんはどんな気持ちで見ているのか。そして、この地域交通をこれから課題だと思っている方がたくさんいらっしゃると思うので、その中で生活交通と観光における交通をどう考えているのかぜひ教えていただけますか。

**畠山**／大都市と地方都市といった話にあたり、まず図を見ていただくと、地方においては基本的にこの青いところ、やはり地域交通、生活交通の課題が大きいと思っています。青い



ところは基本的に子供とシニア世代しか公共交通に乗っていない、大人の皆さんは自家用車に乗ってらっしゃいますと。そして地域の交通事業者は1~2社しかないような状況です。多くの地域がそういう状況で、しかもその地域の交通事業者がバスの委託とかいろんなものを担っているの、タクシー会社がある、ないの議論じゃないんですね。その交通事業者が地域の交通全体を支えているという状況がすでに起きているので、その人たちと一緒にこれから発展させない限り、地域の移動手段、公共交通がなくなってしまうんですよ。ライドシェアの議論でいくと、大都市と地方都市ではルールが違うし、図の右側に関して言うと、地元の実業者と一緒にやっていく必要があって、なので僕らが今やっていることは地元の実業者の協力型の公共のライドシェアであり、公共の移動手段だと考えています。それとおそらく図の左側ではゲームが違います。観光の観点では当然違う課題があるでしょうし、タクシー事業者もいっぱいあって個人のタクシー会社もある。個人タクシーがあるのが大体目安として人口30万人と言われていまして、そのゲームが違う中でひとまとめにライドシェアといっても進め方がそれぞれ違うんじゃないかなと思っています。

**藤野** / そうするといわゆるウーバー型のライドシェアが出てきたとしても、生活、公共交通型のものと、それからウーバーのような観光客にもってというのは、実は両立し得るってことですかね。

**畠山** / 両立し得るかもしれないですが、優良事例発表の際に少し話したように、朝日町の場合、労働に200円しかコストを払っていないんですよ。なのでコストを目的にドライバーの方は動かなくて、そのコストを目的にやる話と、コストではなくみんなの気持ちで回すって話はかなり違うんじゃないかなと思います。

**藤野** / そうですね。でも、おそらく今ドライバーをさせている方っていうのは、実際に自分の生活動線の中でやられている方が多いので、だから多分200円でもオッケーで、それで稼ぎたいという人がいれば、それを利用する人が来るんじゃないかなと思っているのですが、その辺りはどうでしょうか。

**畠山** / 自分もそう思います。行財政改革の一つとして住民目線で公共サービス再編しようという話がよくあると思うのですが、住民の声をそのまま全部聞いていってそれを形にすると、誰もコストが安くて家まで送ってよ、にしかならないと思うんですよ。

**藤野** / 仰るとおりですね。それが一番ですもんね。

**畠山** / なのでサービスのコストとクオリティの部分には妥当性がないと駄目だと思うんですよ。そうしないと、ただ単に住民目線でいくと行政が負担すればみんなタダで家まで送ってほしいとなってしまうだけなので、そこは相互理解が大事で、これは生活交通だから助け合いでやろう、観光客が来たらここはみんな楽しませて儲けようでいいと思います。そういうコストとクオリティの話がきちんと分けて議論できれば、この朝日町でもその変容ができるんじゃないかなと思っています。

**藤野** / こうした話はじっくり聞けば分かるけど意外と複雑な部分があって、それをどうやって浸透させるのかが結構大変だなと思うのですが、ノックルみたいなものが先に広がっていった、その後にみんなが考えているようなライドシェアの話が出てくるとすんなりいくんじゃないかなと思っています。

**畠山** / そうですね。そのためにも地元の実業者と一緒にやっている具体的な事例がちゃんと定着しないと、表面的な話になってしまうんじゃないかなと思います。

**藤野** / そうですね。だからどうしても敵対者だと捉えてしまって、僕は守る側だ、となってしまうということですね。あとは全般的な話を聞きながら最後まとめていきたいなと思います。今日はノックルをはじめ地方の公共交通についてお話してきましたが、過疎問題シンポジウムですべて皆さんそれだけに興味があるわけではなく、これから過疎地域でどうやってその社会課題に対して取り組むのかということにも関心があると思います。畠山さんも実際に活動されていて、過疎地域における可能性というのいろいろ感じていると思うのですが、どんなところにあると思いますか。

**畠山** / 過疎地域の可能性については、まさに昨日の宮口先生のお話にもあったように、豊かな少数社会に変わるんじゃないかなと、そうなる可能性があると思います。富山県もウェルビーイングをビジョンとして掲げていて、住民からすると難しい言葉かもしれませんが、シンプルに人が幸せでいられるとか、誰かの役に立っているとか、そういうものが地域社会こそ実感できるのかなと。最近少しびっくりしたのが、東京の世田谷の家の横の住民が引っ越したんですけど、何か工事しているなと思っていたら取り壊されて、実は引っ越しだったんですよ。引っ越しを事前に知らされず、挨拶もないみたいなの。

スペシャルトークセッション 「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

**藤野**／それはショックですね。朝日町に入れ込んでいたからじゃないですか。

**畠山**／僕の行いも悪かったのかもしれないですが、とにかくそれくらい都心は個人社会なところがかなり進んでいて、個人のプライバシーは各個人でっていう話で、都心に家もあるのでその価値観もありとえばありだと思うのですが、そうじゃない価値が過疎地域には必ずあるので、そこは本当に魅力だと思います。

**藤野**／実は私が委員を務めている富山県のウェルビーイングの取り組みが総務大臣賞を取ったんです。

**畠山**／藤野さんからみてウェルビーイングっていうのはどういう状態なんですか。

**藤野**／ウェルビーイングを考えるにあたって大事なのは富山県って素晴らしいところで、世帯収入でいうと、県全体では47都道府県で5位なんです。東京、大阪、愛知、福岡、その次なんです。だからすごいんですよ。経済的に豊かなんですよ。じゃあ何が問題かっていうと、生活が豊かなのに女性がどんどん流出している。これを何とかしたいということで、経済力が全国上位でも女性が流出しているってことは理由はそこじゃないってことですよ。5位でも流出しているのもっと別のことなんです。女性が流出しないためにどう

すればいいのか。女性がいなくなると子どもも生まれないし、社会が成り立たない。ですから若い女性に県内に留まってもらうためには「真の幸せ」が大事で、だから僕はもう少し、柱を経済、もちろん経済も伸ばさないといけないんだけど、経済を伸ばす以上にその真の幸せってところに目を向けないといけないというのがウェルビーイングを掲げている理由なんですよ。

そのウェルビーイングについても、健康でお金があればいいというだけではなく、やっぱり真の楽しさと豊かさっていうのが大事で、ワクワクできるとかドキドキできるとかっていうところも含めて考えなければいけないと思っています。だから朝日町も安全安心っていうところだけじゃなくて、よりドキドキできるか、ワクワクできるかってことが大事で。でもそのためには人の移動が重要で、人が繋がるためには人が停滞して止まっている状態じゃダメで、やっぱり人の交流が進むことが大事です。だから博報堂さん、畠山さんがやっているノックアウトみたいなものが出てきてうまく攪拌するといいなと思っています。

そんな攪拌している状態がウェルビーイングなんじゃないかなと個人的には思っています。

ということであつという間に時間になってしまいました。もう少し話を聞きたかったのですが、午後の部もあると思いますので、これで終わりにしたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

